

2013教学講演会 「教え」と「おかげ」

こんな声を聞きますか？

「教え」と「おかげ」に関わってお話したいと思います。

みなさんはこんな声を聞いたことがないでしょうか。「おかげに頼る信心は功利的で浅薄だ」とか、その一方で「目に見えるおかげを現すことは、教えを伝えるよりも先決だ」とかです。こうした言は多くの人が耳にしているでしょう。ここにある見方は、どのようなものでしょう？なぜそのように対比的に見るのでしょうか。その理由は何でしょうか？なぜ対立的に見させるのでしょうか？問いを次のように変えてみます。対比的に見る、その経験はどのようなものなのでしょうか？

「教え」と「おかげ」を対比的に見る見方とは？

先輩諸師は従前程顕著なる靈験が立たぬという事を非常に憂い、青年教師に其の方の修行が足らぬと言って深慨せらるるが、[...]社会をも風靡し我々後輩をも只管感嘆せしむる程顕著なる靈頭を實際先輩諸師自ら今一度実現して呉れられる事は出来ないであろうか。[...]兎にも角にも(靈験は一引用者)神秘に属する事で、我々のかれこれ言い得る限りではない。我々も得たいと希う事は人に譲らぬのであるが、外から責められると、先ず範を示して貰う事が出来たらばという願いが先に立つ。

[...]思想—人格に根ざした思想を中心にして社会に立つという事なれば、略修養の見当はつく。如何なる人格という事を具体的に語る事は出来ないが、心の中に期する所全くあてどがないではない。理想として努力する方途だけについて居る。こういうのが目下青年側の一般の考えであるらしく思われる。前の靈験中心—神徳中心は先輩側の志向、後の人格中心—人徳中心は青年側の志向、大体この二派に分れて本教の将来を念うというのが目下の実状であると思う。(越年所感『大教新報』1911・1・6)

こうした見方を調べました。結構、古くからあるんですね。すでに明治の末に確認できます。たとえば、スライドにあるように明治44年、高橋正雄の言葉に確認

できます。彼はこんなことを言っています。「頽廢したる精神を作興する活力が欲しい」とか、「将来如何なる点を力にして本教は社会に立って行かんとするか」とか。それに合わせて出てきているのです。

先輩諸師は「靈験中心—神徳中心」だ。私たち青年は「人格中心—人徳中心」である。信心の意義は「思想—人格」形成上にあるのではないか。

このように、「靈験」と「教え」を対比させ、「教え」を重視する発言が確かめられるのです。この彼の口ぶりから何を感じますか？上の世代に対する心理的反発でしょう。では、その反発の中から見えてくるものは何でしょうか？たとえば、こんな挑発的な言葉の中に。

…社会をも風靡し我々後輩をも只管感嘆せしむる程顕著なる靈頭を實際先輩諸師自ら今一度実現して呉れられる事は出来ないであろうか。

この言葉で言いたかったことは、「先輩達が言うところの靈験は、われわれに訴えるものとなっていない！」というものでしょう。「教え」を重視する者が大事にしたのは、心からの納得です。高橋を始めとして、青年達は、「靈験」ばかり言うのは説得力に欠けると見ていたのです。彼らは、心の底から信ずるに値するものを求めていたからです。どうも、不思議で奇跡的なおかげは場当たりのなったりし、インチキ臭くなったりするのを問題視しているようです。

一方、おかげを重視する側はどうでしょうか。たとえば高橋富枝に見てみましょう。『高橋富枝師自叙録』(高橋富枝述・1934)には、こうあります。

今時は御道も結構に立ち、楽に信心が出来ますが、その代わりそれだけの御蔭しか頂

けません、昔は平の信者でも手御籤の一つも判る者が沢山おりましたが、只今では御取次する人でも御徳（手みくじをいただけるような一引用者）という事を知らぬ人が多くござります（24頁）。

あるいは

教理も次第に整い御道は立派に立ちましたが、教えの中の理屈が次第に進んで来て、御徳はその割合に進まぬ様に思われます（58頁）。

こう述べています。

つまり「いまは理屈ばかりで、ごひれいがたっていない！」。これが彼女の言いたかったことです。彼女にそう言わせたのは何でしょう？そこには神の現れの問題、「現前性」ということが関係しています。どういうことでしょうか？

問題の仕方の違い

「現前性」とは、「まさにあらわれる。そのさま」をいう言葉です。「おかげ」はそれを示す言葉でした。というのも「おかげ」は「靈験」であり、「不思議なしるし」です。つまり「神の現れ」だからです。それは言い方に籠もっています。

たとえば「おかげ」という言葉は、どういう言い方になっているのでしょうか？「ああおかげ頂いた！」というものでしょう。そしてそこでは「ああありがたい！」、「何と云ってよいやら」という強く心うたれるような受けとめもなされているでしょう。そしてその出来事は「神のはからい」として感じられています。それこそ神が現れる出来事です。「まさに、そこに神さまが！」、こうした体験になっているのです。

高橋富枝にすれば、そうした「おかげ」を現すことが、信心にとって何より大事だと見ていたのです。それからすると、「教え」重視の信心は「頭でっかち」です。神を現すことへ目がけた信心ではありません。つまり、現前性に立脚していないと見えます。でもはたしてそうなのでしょうか？たとえば「なるほどこれぞ御理解だ！」という思いをもつこともあるでしょう。これも神の現れになっています。そうすると、どうも意見の対立は、問題の仕方の違いのようになってきます。

「信心のいま」の受けとめ方に

ここで大事なことを言っておきたいと思います。現前性に立った信心理解が妨げられている問題。その問題は、実は「教え」重視の人間にとっても問題になっているのです。でも問題の仕方が違いました。そのことが、彼女と彼らの言い方の違い、「信心のいま」の受けとめ方の違いとして見えてきます。

彼女の言い方に注目しましょう。「今時は…」と言っているところです。この言い方は「それにしても、何でこうなったの？」でしょう。彼女は、すでにそんなご時世だとわかっています。でもどこか納得できない違和感があるようです。このように彼女にとっての「いま」は「何でこうなったの？」なのでした。一方、彼らにとっての「いま」は「すでにこうなっている」というものだったのでした。彼らはこう問うていました。

「おかげ」を言うだけではダメ。だっていまどき、奇跡的な「おかげ」信心は通用しないから。でも、だからこそ、「神の現れ」を、心の底から理解し、伝えていくあり方が必要なんじゃないの？

こうした考えが、その後どうなるのかは、このたび紀要『金光教学』53号に載せていただいた「神の現前性への問い ―明治末大正期の「教え」と「おかげ」の諸相から―」という論文を読んでいただければと思います。

いずれにしても、「おかげ」も「教え」も、共通の土俵で見ることができそうです。それが、現前性とその意味づけの問題なのです。どういうことかと言えば――

ある出来事の中で生じた「おかげ」があります。その「おかげ」に対して、人は意味づけを求めます。おかげの出来事として、そこで大事になってくるのが「教え」です。また逆にこういうこともあります。「教え」によってある出来事を眺めます。すると、その出来事に「おかげ」を見ることもあるでしょう。

このように、「教え」の出来事は「おかげ」の出来事に、「おかげ」の出来事は「教え」の出来事になっていくのです。

金光学院の授業で

さて、ここで言っている、神の現れとしての現前性ですが、あまり聞き慣れない言葉かも知れません。よりよく知るために、今年の学院生の皆さんに教祖についての講義をする機会を頂いた時の話を聞いていただきたいと思います。この講義のテーマは「教祖を知って、何を知ることなの？」です。

まず、学院生の皆さんに質問したんですね。教祖って誰でしょう？すると「金光大神です」。正しい答えです。で、次に「教祖って何でしょう？」とたずねました。すると一瞬、驚いています。何を聞いているの？っていう顔つきです。でもしっかり「金光教を始めた人」と答えてくれました。

その後、事典に載っている「教祖」について考えていきました。たとえば『宗教学事典』（星野英紀他編・丸善・2010）にはこう書かれています。「教祖とは広い意味では宗教や宗派の創始者、あるいは創唱者…」(242頁)といったものです。スライドにはこう書きました。

そりゃそうでしょう。でも何か物足りないと思いませんか？なぜでしょう？

学院生に問いかけつつ、私はこう答えました。

辞典や事典にあるのは、あくまでも概念的な説明に過ぎません。これは仕方のないことですが。私たちが「教祖って何だろう？」と考え、求めたい関心とは少し違うのです。私たちが言う「教祖」とは、何でしょう？それはいつも「あの教祖」のことなんじゃないでしょうか。じゃあ「あの教祖」って、どういう教祖なのでしょう？たとえばこんな感じに出ているようなものではないでしょうか？

そう言って見てもらったのが、車田正美さんが描いた『聖闘士聖矢』というマンガの一コマです。それは悪と闘う希望の闘士が女神に会う場面で、「貴方は……」「そ…その声は」と言いながら出会っているものです。そこに「こんな感じ」が良く現れていると思うのです。私はこう続けました。

私たちは、「教祖」という言葉を感じ入りながら使っています。信心のただ中で使うのですから、信心と距離を取った言葉では響いてこないわけです。

そうなんですね。現前性という言葉によって言いたいのは、「響いてくるあり方」であり、それが「教え」や「おかげ」には欠かせないと考えるのです。今年はやった『あまちゃん』

の「じえじえじえ」にも通じているといえるかもしれません。

現前性ということ言えば、もう一つ大事なことがあります。「響いてくるあり方」に加えて「いま」という問題です。「信心のいま」であり、「信心の置かれたいま」です。見てきた高橋富枝も高橋正雄も「いま」を前にして、「教え」と「おかげ」を問題にしていましたね。私たちにとっての「信心のいま」。それを次に考えてみたいと思います。

「いま、どんな時代ですか？」

これも学院生に聞いたことです。「いま、どんな時代ですか？」と。こう答えてくれました。一部紹介します。

- 食べ物に恵まれ、ひどい争いもない。技術が発達した国とそうでなく貧しく、日に何万人もの人が飢えでなくなってしまう国とのギャップがはげしすぎる時代。
- 富と貧、生と死が二極化した世界。それを当たり前を受けている世界。
- 物と情報が溢れ、多様な価値観が認められる一方で、宗教は否定され、どう生きていいのかわからなくなっている人がたくさんいる。
- 「お客様は神様」という、お金を払った人が偉く何をしても許されるような錯覚からか感謝するとか、敬意を払う、尊重しあう、という心が失われていると思います。

どれも大事な指摘です。そしてさらに大事なことは、この意見には「ある思い」がかぶさっているということです。「これでいいの？」っていう思いです。

ところで、「いま、どんな時代ですか？」の問いの答えは、何を意味するのでしょうか？「これで、いいの？」っていう思いがかぶさっている、そう考えると見えだします。それは、「だから、信心が大事になってくる」ということです。学院生は、「こんな時代だから信心が大事になってくる」と言っていたのです。知らず知らずのうちに、時代に向けた信心の価値を答えていたのです。

「おかげ」からの問いかけ

ここで心にとめておきたいことがあります。それは、「神が現れてくれますように」と願わせている張本人は、いつも「私たちのいま」だということです。でも、そんな「私たちのいま」は、どうも信心と折り合いがつきません。そうすると決まってこんな声が出てきます。それがこれです。今年10月27日付けの『金光新聞』の特集記事に、ある青年教師が信者さんから言われた言葉が紹介されていました。



ある時、信者さんから「教祖様のところでは奇跡的なおかげが起きていたのに、今はそれが見えない」と言われ、今の時代では目に見えるようなおかげは頂けないのかと問われたんです。

これは「おかげ」からの問いかけです。そして興味深いのは、それに付けられたキャプションです。「教会に求められる事」とあり、それを受けて大きな文字で「具体的な見えるおかげ示す」と、こうあるのです。



いま、目に見えるような「おかげ」は頂けない。見てきたように、こうした意見は、いつの時代にも出ています。でも、考えてみたいのは、その出方かどうかということです。出方には、その時代ごとの事情があるでしょう。私には、こうした意見の出方には、「信心のいま」が「信心の響き方」に向かって突きつけている、「いま」なりの事情があるように思えるのです。

それに入る前に、ここまでの要点を簡単に確認しておきます。

まず、「おかげ」を神の現れ=現前性としてみてきました。その現前性には、「響いてくるあり方」と「信心のいま」という問題が大切だということを述べてきました。ざっと言うとこんな話です。

話を戻します。ここで質問したいと思います。それは――

なぜ、この記事の見出しは「具体的な見えるおかげ示す」となっているのでしょうか？

答えは、簡単ですね。「そのままでは見えないから」です。ここまでの話が何について話すことになってきたか、もうおわかりでしょう。神の現れは、そのままでは見えません。ですから見えるしくみを信心に求めていたのです。

おかげの「見える化」とは？

いまの時代、どうもそのままでは神の現れは見えませんし、見えてきそうにありません。そうこうするうちに見ないままになってしまうかもしれません。そんな「信心のいま」、「信心が置かれたいま」なのです。「それでいいの?」、学院生はもちろん、これは信心にあずかる多くの人の思いではないでしょうか？

そうなんです。「それでいいの?」という思いは、「心への響き方」として「教え」や「おかげ」を問題にしていたのです。そうとしてこの問題には、時代ごとの事情があると言いました。なので「いま」の事情ということで考えてみたいと思います。

皆さんはご存じでしょうか？いま、どうもこなれていない言葉が登場しています。それは「見える化」です。これは見えないものを見させる言葉です。節電が叫ばれて、よく聞くようになりました。よく見えない消費電力量を見るためにです。

この言葉が流行るように、私たちは、見えないものをよく考えないといけない時代に突入しています。11月3日付けの金光新聞、「読者のひろば」には、こんなメッセージが載っていました。

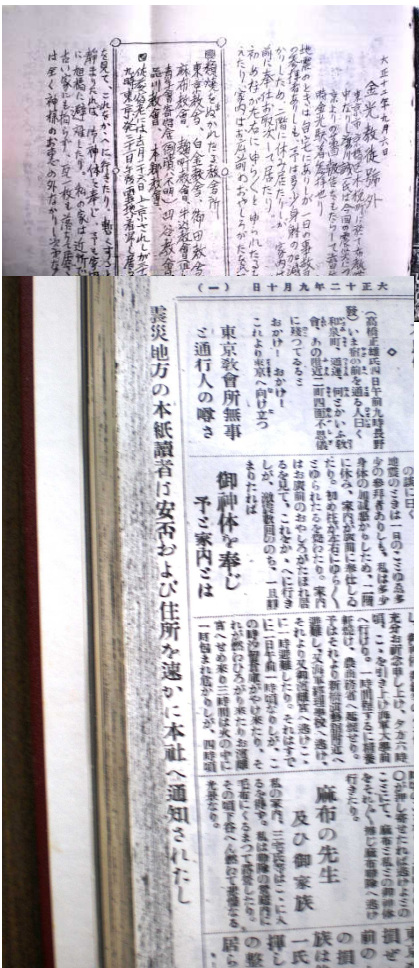


「フクシマの今」を全国に

そうなんです。放射能は目に見えないのです。そして「信心のいま」は「震災後のいま」であり「原発事故後のいま」なんです。信心ならでの「見える化」、「見させる力」が求められています。それはどうい

うところで働くのでしょうか？

震災後のいまとお年柄



今年は教祖130年です。お年柄に関わって90年前のそのことを考えて見ることにしたいと思います。大正12年です。教祖40年記念大祭の年です。10月に教祖大祭がありました。ではその一ヶ月前に何が起きたのでしょうか？関東大震災です。

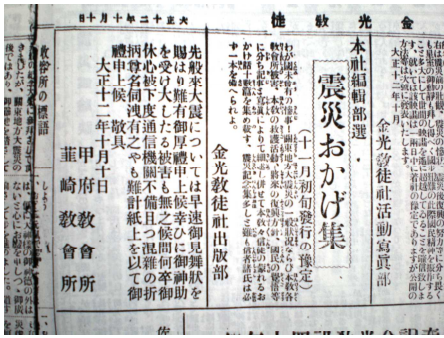
震災直後、号外が9月6日付けで出されます。9月10日の一面で震災記事が載りました。付録の欄外には安否確認の文字が。

9月22日付けには、「灰原の都より」(佐藤一夫)、「大震災と大火災と我等」(松原龍太郎)という記事があり、そして震災状況をレポートする「火焰の町を横断して」の記事が見えます。注目したいのはこのレポートが「震災霊験談」と銘打っていることです。以降、霊験談がレポートのかたちで掲載されていきます。霊験談の記事も募集しています。そのことが10月10日付けの紙面からもわかります。

教祖40年祭は、予定通り4日7日10日に仕えられました。しかし9月22日付けの「教祖四十年大祭準備彙報」欄を見ますと「東京地方は到底団体をなして参拝することは不可能」とあります。10月1日付けの同じ欄には、「大祭は既定の通り」としながら、「時節柄参拝者は相警め謹慎せよ」と呼びかけています。

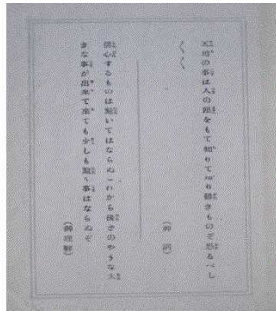
「教え」や「おかげ」の出来事として

このように奉迎ムードは一転しました。重苦しい自粛ムードです。その中で、大祭の最中の10月10日付け『金光教徒』を見て下さい。直後に「おかげ話」、「霊験談」を募集していたんですね。翌年『震災おかげ集』という本が出されています。前半で被害状況や本教の救護活動を述べ、後半で震災体験が紹介されていくという体裁です。



これを見て驚いたんですね。ページをめくってみます。最初にタイトルです。次に出てくるのは詔書です。二つあります。震災直後と二ヶ月後です。「国民は天皇の意を体し、協力して国家の興隆に勉めよ」といった内容です。当時は、刊行物に詔書がよく載っていましたから、「ああ載ってるのね」と思って私はめくります。当時の人もそうでしょう。どういうことが言われたのか、すでにあちこちで

聞いていますから。問題は、そうしてページを二回めくった、左のページです。そこに「教え」が記載されていたんですね。それがこれです。



いきなり、こんな教えが。

天地の事は 人の眼をもて知りて知り難きものぞ 恐るべし

〰〰 (神訓)

信心するものは驚いてはならぬ これから後どのような大きな事が出来て来ても 少しも驚く事はならぬぞ (御理解)

どう思いますか？ 震災の傷はまだ癒えていません。そんな中で、こんな風に「教え」を掲げているのです。

こころ傷ついた人に向かって、「恐るべし」とか「驚い

てはならぬ」と誠めています。これでは不安を解消するどころか不安をあおることになりかねません。信心に対する信頼性がぐらつき、さらに傷つくことになりかねません。

体験談もその内容のほとんどが悲惨なものでした。長くなるのでここでは紹介しませんが、でも読んでいくうちに見えてくるのです。それは、そんな中で人は信心を求めていたんだということです。見えてくるのは、「教え」や「おかげ」の出来事と捉えることで、信じられる「何か」を見ようとする人たちの姿です。その人たちのありようには、「教え」や「おかげ」と心を感じる場所に現れるのが神だということが信じられているのです。「信じようとした」と言った方がよいかもしれません。

おわりに

まとめにかかりたいと思います。

震災後のいま。信じられるほどの「何か」は、どう見られているのでしょうか？この問いかけは「教え」と「おかげ」に関わっています。というのも、「これぞ、教えだ！」や「ああおかげ頂いた！」というとき、私たちはそこで見えない「何か」を見ているからです。

そしてこれは大事だと思うのですが、いまきつとその「何か」を世の人たちは求めているのです。なぜなら、それは「人を生かすもの」だからです。

そんな中で私たちは、それが「人を生かすもの」だということに対して微塵の疑いも持っていないのです。これこそ一番の不思議ではないでしょうか？

ほら、「不思議なおかげ」は、見ようと思えばいつも身近にあるのです。